

砂漠について児童への現地理解学習

—— 生活科での単元開発 ——

前アブダビ日本人学校 教諭

千葉県銚子市立明神小学校 教諭 平野 誠 一

キーワード：在外教育施設，アブダビ，砂漠，生活科，現地理解教育，単元開発

1. はじめに

3年間教鞭をとったアブダビ日本人学校のあるアラブ首長国連邦の首都アブダビは砂漠が国土の90%程度を占める国である。都市部は砂漠の国家と感じさせない緑に囲まれ、高層ビルが立ち並ぶが、一歩郊外へ踏み出すと、そこは砂漠の世界が広がっている。

「太陽が照りつけ、死ぬほど暑くて、木も草も、そして水など一滴もない砂の世界。そこにはもちろん生き物も住めるはずはない」。アブダビに赴任する前、それが砂漠だと思っていた。しかし砂漠を知れば知るほど、美しいサソリ、灼熱の中で生きるゴミムシダマシなど、砂漠に生きる様々な生き物を目のあたりにした。砂漠にもたくさんの生き物があることを知って驚いた。焼け付く様に暑い砂漠の中で、動物や昆虫はどうやって生きているのだろう。水はどうしているのだろう。食べ物？ 住み家は？ そもそも砂漠って一体何だろう？ これらの疑問をもとに「砂漠について知る学習」をテーマにして単元開発を試みた。

また、国土のほとんどが砂漠の環境におかれているアブダビ日本人学校であることから、児童生徒への砂漠に関する理解を深めさせたい。しかし、砂漠は日本においては、一般的な自然とは言えない。そこで、身近な自然をきっかけにして、段階的に砂漠へと意識を広げていきたいと考えた。アブダビ日本人学校における砂漠遠足を生活科の中で、どのように系統的・発展的な学習教材としてとらえていくかに重点を置く。深く調べることで自分の身近な地域のよさに気づき、愛着をもてるようにしたい。そして、日本の学習内容を考慮に入れながら、現地理解学習を展開していき、子どもたちが砂漠を身近に感じられるような単元開発を試みた。

2. 砂漠遠足へ向けての単元構想

生活科で行う学習として「学校のまわりたんけん」があるが、アブダビでは気候や治安上の理由から、あまり屋外で活動することができないので、子どもたちは校外で学習する経験が少ない。そこで本研修では、段階的に活動場所と内容を広げて行った。第1時は学校の周囲の様子を観察しながら探検マップを作った。2回目は、探検で見つけた公園へ行く。そこで初めての班活動を行った。3回目は、ナツメヤシが生い茂る森で植物の観察をした。4回目は、季節の違う森の様子を観察をし、公園でグループ活動、及び全員で遊ぶ活動を行った。自分たちで考え、行動する機会を大切に、安全な範囲でグループ活動や個人活動の場面を取り入れた。活動範囲や内容を少しずつ広げていくことで、砂漠遠足の学習に系統性をもたせた。子どもたちは班編成をして、班で相談しながら活動し、砂漠遠足へ向けて、自分たちで活動できるように計画を立てられるようになった。このような流れで、今まで単発で行われていた砂漠遠足をより充実させることができる。また公園の自然に触れ、動物や植物に慣れるとともに、公共施設の使い方について身につけることもできた。

3. 砂漠遠足での学習

事前の調べ学習として「すばらしきアブダビ」（アブダビ日本人学校の発行する現地理解教育を推進する資料）、図書館の書籍を使用して、砂漠の生き物・植物を調べる。活動内容については、班長を中心に砂漠でのグループ活動計画を立てたり、全員遊び係を設けたりして、自分たちで砂漠での遊び方を考えた。また、近所のグロッサリー（雑貨屋）に遠足のためのおやつを買いに行き、簡単な英会話も行った。

砂漠遠足の目的は、以下のものである。

- ・砂漠の自然に触れることを通して、その美しさや厳しさを体験し、環境に関心を持つとともに、国土の大半を砂漠で占められているUAEに対する現地理解を深める。
- ・学年が異なる児童相互の活動を通して、所属感、存在感、充実感を味わわせる。
- ・一人一人が自分の役割や立場を理解し、適切な集団行動がとれる力を育む。
- ・砂漠のすばらしさに触れることを通して、郷土の素晴らしさを理解し、UAE 児童の愛国心を涵養する。

このような目的の達成のために以下のことを重点項目として指導を行った。

- ・砂漠の自然や生き物に目を向けさせる。
- ・グループや全員でする活動では、協力して仲良く遊ぶ。
- ・図工や生活科で作った自分の道具で遊ぶ。
- ・英語またはアラビア語であいさつをする。

以上のような事前学習から、砂漠でのグループ遊び・調べ学習の質が高まった。

- ・ソリ滑りなど砂漠の特性をいかした遊びをグループで行う。
- ・ドッチボール・サッカーなど、砂漠で行ってみるとどうなるか試す。
- ・砂山を作ったり、穴を掘って遊んだりする。また、水を流して遊ぶ。
- ・「すばらしきアブダビ」で知ったデザートローズを探す。
- ・植物を詳しく観察する。特にサルソラの花を発見して喜んでた。
- ・蝶やゴミムシダマシ、トカゲなど、砂漠で生きる動物を探す。

「すばらしきアブダビ」などの書籍で事前学習をし、砂漠で実際に確かめることが有効であった。また学校の周りや公園の自然に対して、砂漠はどう違うのか、子どもたちの意識が向く機会となった。

次に、みんなで遊ぼうの様子も年々他教科との関連や砂漠の特性を生かした遊びを考えるようにした。2012年は、砂漠のデューンをソリ滑り競争とたこ上げ大会（図工で制作）2013年は、手押し相撲大会（体育）とこおりおに（2年生国語の「おにごっこ」でルールを考えた）を実施した。

最後に自由活動の様子にも変化が見られた。最初は怖がって砂の表面で遊んでいるだけであったが、砂丘を泳いだり、転げ回ってみたりするなど、砂に慣れて遊んでいた。自然に対して心と体が開いている様子が見受けられた。また、砂漠の足跡をたどって、昆虫などの生き物を探したり、砂漠にしかない植物をじっくりと観察したりしていた。砂の中を泳いでいた子どもは、穴を深く掘り続け、砂の表面と底の温度の違いに気がつき、日陰と日向の温度差に気がつき、熱いところと冷たいところを発見できた児童もいた。



最初は靴に砂が入ることも嫌がっている子どももいたが、砂に慣れてくると、汚れることも気にせずに、全身で遊ぶようになっていた。

生活科での活動の振り返りとして、絵や文で自分の思いを製本した。本作りにあたっては、国語科の学習とも関連して行った。本の内容は、砂漠での発見新聞、場面ごとの思い出を絵日記にまとめ（バス・グループ活動・みんな遊び・自由研究など）、あとがき、仲間からの言葉、写真集、読後の感想のページで構成した。言語活動の充実へ向けて本作り活動にも重点を置いて取り組んだ。

今回の一連の流れの中での砂漠遠足の成果としては、砂漠の特質を体で感じ、砂の特質に気がつくことができ、自然への畏敬の念も育まれた。また、単発の砂漠行事ではなく、学年を通して系統的な学習として取り組むことができた。課題としては、特異な環境での「気づき」の機会がたくさんあったので、これを更に「学び」の場へ高めていく工夫が必要である。また、3年生以上の学習とどう関連付けていくかがこれからの課題となる。

4. 砂漠遠足以降の現地理解教育

砂漠遠足後も様々な活動を入れた。まずは、海岸における貝拾いである。数は少ないがアブダビにも海岸があるので、砂漠遠足で培った力を基に海岸遠足を開発した。水辺で貝や石などに関わり、体全体で砂漠だけではないアブダビの自然を実感することができた。また、拾ってきた貝を使ってペンダントや写真立てなどの工作を行った。



2月には、スケートリンクを訪れた。冬のような寒さの中でも工夫して遊ぶことで、雪や氷の特性に気づくことをねらいとした。アブダビでは冬を感じることができないので、スケートリンクでの活動は、日本の冬を体感できた。UAE 児童も寒さを感じることができ、彼らに冬の季節感を体験させることができた。また、公共の施設の利用の仕方を考えて、約束を決めたり守ったりする意識も芽生えた。

5. まとめ

まず、本研究の目標である「砂漠」についての現地理解教育について成果を述べたい。アブダビ日本人学校の子どもたちは、砂漠の自然に触れることを通して、その美しさや厳しさを体験した。単純に暑いだけではなく、日向や日陰の温度差、掘ってみたら中は冷たい、トカゲやゴミムシダマシなどの生き物、砂丘などを調べた。その結果、一人一人が砂漠に関心を持つとともに、国土の大半を占めているUAEに対する現地理解を深めることができた。また最初は砂に対して怖がっていた児童も次第に砂に対して体が開き、平気で転げ回る姿が見られた。自然に触れ、砂漠の特質を体で感じるすることができた。更に、本校にはUAE国民の児童がいる。彼らに対して砂漠のすばらしさに触れることで、郷土の素晴らしさを理解し、自分たちの国を愛する心を涵養できた。

次に、砂漠遠足を中心に据えた校外学習についてである。自分の身近な地域の様々な場所、公共物などに関心を持ち、地域のよさに気づき、愛着を持つことができた。それは砂漠遠足を中心に様々な単元を開発し、公園や海岸といった公共施設に関心を持つことができたからである。アブダビも地域のために作られているものが多い。また、雨がほとんど降らない当地において、数多くの公園があり、木々があるということは、すばらしいことである。生活科では、そこまで深めることができないが、その出発点にはなった。自分の身近にある公共の施設に注目し、その特徴や良さを知ろうとすることは、社会科の学習にもつながる大切な力である。しかし、行動範囲と時間が制限された中では、目を向ける手段も機会にも限りがある。様々な公共施設や自然環境を訪れることで今回の学習のような「気づき」の機会を大切に、「学び」へと高めていけることが今後の課題と考えられる。

また、今回の生活科の校外学習では、「公共施設の利用」を学び、実践した。アイスリンクの学校開放による利用は、他の学校との共同の利用となったが、非常にスムーズに利用できた。今後は他校との交流も考えられる学習モデルであることが、この実践で明らかになった。博物館の利用など、今後社会科見学、あるいは特別活動としての学校利用も考えていける有効な施設であることが確認された。更に、校外学習後、継続的に新聞・日記によるまとめに取り組み、毎回着実に進歩する様子が伺えた。言語活動の充実が図れたと考える。

生活科の学習は、「自分の身近な地域の様々な場所、公共物などに関心を持ち、地域のよさに気づき、愛着をもつことができるようにする」ことをねらっている。今回は、ねらいに迫る学習を試みたが、砂漠についての学習が日本の学習内容とどれだけリンクできるかが課題となった。また、現地理解教育を行うことで、自分と周りの環境とのつながりを深めることができた。高温多湿、砂漠に囲まれた厳しい環境の中でも、楽しみを見出す努力と工夫がある。日本人である我々と砂漠には大きな隔たりがあったが、一歩近づくことができた。砂漠について知ることでアラブ首長国連邦、アブダビという地域への思いを、自分の「地域」としての思いへと高めることができる。現地理解教育を深めていくことが、自分と周りとのつながりを深めることにつながることを検証できた。